

第一 部

東洋 哲学

第一 章

印度 哲学

第二 章

印度 哲学 一般ノ 注意

印度 哲学ハ 大抵 皆 轉迷 開悟 悟 拔 苦 與 樂ヲ 以テ 其

起 點ト 為シ 或ハ 吠陀（即チ 解脱ノ 首） 舊 教ニ 附會シ 或ハ 之ヲ

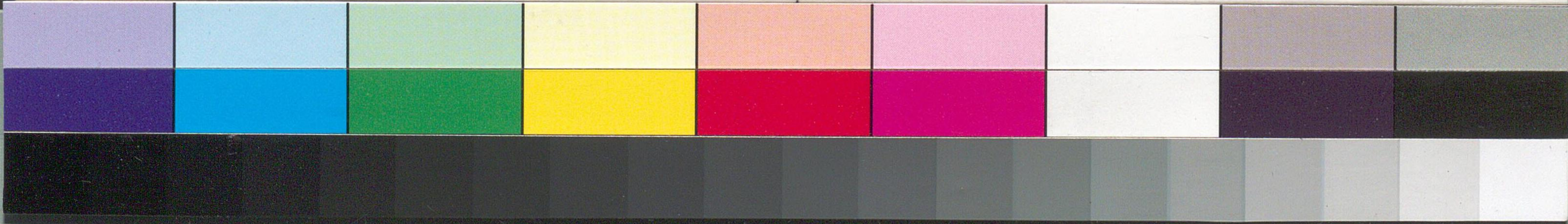
吠陀（經典） 舊 教ニ 附會セ 其 教 起テ 過 去 永 遠 無

量 劫ノ 古ニ 托 以テ 其 哲学 系統ノ 廣 宣 流

布ニ 便スルヲ 常ト 爲シ 大抵 皆 宗教 的 儀 式ヲ 備ヘ

テ 無シ 故ニ 印度 哲学 系統ノ 多クハ 宗教 的 的 回

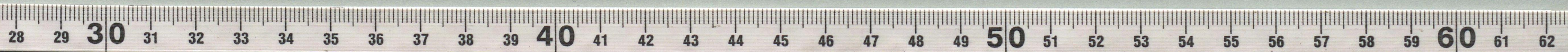
經 典ヲ 解 釋スルニ 哲学 的 新 原 理ヲ 以テ 之ル



ニ非レハ哲學的新原理ノ外面ヲ莊嚴スルニ宗
教的回經典回儀式ヲ以テ之タル者其多キニ居
ル
之ニ加フルニ印度ニ於テハ確實ナル年代ヲ追
テ記述セル所ノ歴史ノ備ハラサルカ為メニ哲
字各系統の起リ前後ヲ尋釋スル甚々難シ夫ノ
サニスクリト語ニ通熟スルヲ以テ有名ナリシ
所ノマクスミューラーノ如キスラ印度哲學各系
統ハ希臘哲學ノ甲乙倒シテ乙起リ乙衰ヘテ丙
盛ナルカ如ク前後相繼續シテ真理ノ樞軸ヲ究

東洋書院製

達セシメタルニ非スニテ各派ノ哲學系統相同時
ニ起リ同時ニ哲學界ニ馳驅シテ真理ノ樞軸ヲ
爭ヒタルナラントサヘ想像シタリキ
事情此ノ如クナルカ故ニ今茲ニ印度哲學各系
統ノ原理ヲ判釈スルニ當リ之ヲ或ル時代ニ區
畫シテ代ノ風調ヲ判釈シ而シテ後各系統ノ原
理ニ論及スルノ便宜ヲ致ス故ニ此第一部第一款
印度哲學ノ部ニ於テハ往々強テ時代ノ前後ニ拘ハラ
其原理ノ存スル所ニ隨テ之ヲ類別判釈スルニ
可能ハス

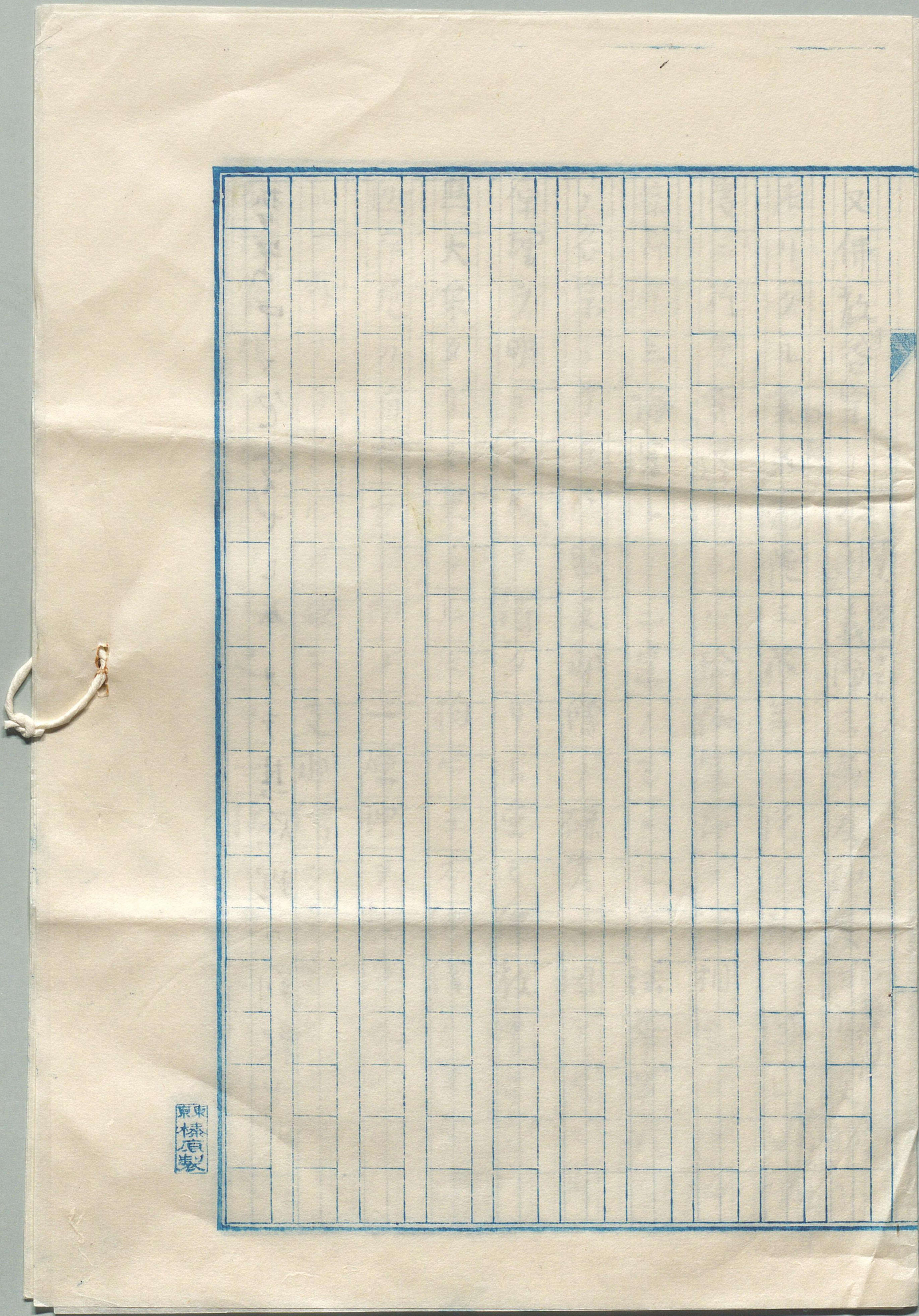


又佛敎各宗ノ如印度ニ留シテ義淨三藏及印度ヨリ支那ニ
 来リタル実目義淨三藏等ノ説ク所ニ因リ以佛敎各宗印
 度ニ於テ發達セルハ瑜伽宗即チ法相宗ト中論
 宗即チ三論宗トノ二宗ノ一ニシテ法華華嚴等
 各宗ニ至テハ皆支那僧ノ研究ニ因テ大ニ其
 原理ヲ明ニスルヲ得タリト至モ佛敎中各宗ハ
 其大乘タリト乘タルニ拘ハラス他代ノ傳人印度親
 迦牟尼カ首唱セシ所ノ一原理ヲ敷演タル者ハ
 ルニ外ナラザルカ故ニ支那僧カ發見セル所ノ
 教理教規ノ如キヲモ之ヲ一括シテ之ヲ此印度

東洋文庫

此中ニ包含セシムメテ其原理ヲ判釈セリ





東
様
印

